

【登場人物】

源氏の君：赤い狩衣で

垣間見する

若紫：赤い衣の少女

少納言の乳母：黄色い衣

犬君：白い衣の少女

【場面解説】

「雀の子を犬君が逃がしつる」で有名な源氏物語でも屈指の名場面。源氏の君が療養に訪れていた北山で、恋焦がれている藤壺宮に生き写しの少女(若紫)を垣間見します。原作では雀がすでに逃げてしまった後、泣きながら走り出てきた若紫を目撃しますが、扇面では後の源氏絵でも定番になった「雀が飛び去った瞬間」としてより印象的に描かれています。祖母・北山の尼君が将来を心配するほど年の割に幼い若紫でしたが、この後、源氏の君に引き取られ、非の打ち所のない女性に成長します。源氏の君に一番愛され「春の御方」と呼ばれるほど春を愛し、その美しさは「樺桜」のようだと言われた紫の上が、浄土寺本に初めて登場する場面には、自然豊かな北山の春の盛りの山桜が描かれています。



【詞書】ことばがき 扇面に書かれている文字

おひたゝむ

ありかもしらぬわか草を

をくらす露も

きえむ空なまき

(北山の尼君から若紫への和歌)

【現代語訳】

これからどのように成長して、どこに落ち着くかも分からない若草のような、あなたのこと気がかりで、後に残して行かなければならない露の身のような私は、死ぬにも死ねません。